地球環境基金 助成団体レポート

助成団体レポート①

定光寺（じょうこうじ）ほたるの里の会

ほたると子どもたちが触れ合える里山作り

定光寺ほたるの里の会とは？

定光寺ほたるの里の会」は、ゲンジボタルの飛び交う環境づくりを通して、里山の保全と管理の大切さを伝えている。ゲンジボタルが生息するためには、〈きれいな水があること〉、〈ほたるの幼虫のエサになるカワニナがいること〉、そして〈夜がじゅうぶん暗いこと〉が必要とされる。

「里の会」は、これらの条件を満たすため、里山の整備に日々汗を流し、より多くのほたるが生息できる場を作る活動を続けている。また、「里の会」は、鑑賞会だけでなく、「体験型」の里山学習を導入し、ほたるを通した里山の環境教育にも力を入れている。

活動を始めたころは、「今の子供たちどころか、その親御さんたちも飛んでいるほたるを見たことがないのでは」という状況であったが、10年以上続く活動によって、最近では、保育園の頃にゲンジボタルの幼虫の放流に参加した子が、高校生になってほたるの鑑賞会に訪れるようにもなったという。このような地域における世代間の交流の場づくりも、「里の会」の重要な活動である。

ほたるが生息するための条件

水がキレイなこと
ゲンジボタルの幼虫は、小川や渓流に生息し、成虫になるとほとんど何も食べず、水しか飲まないため、キレイな水がないと生きていくことができない。「ほたるの里」では、山から伏流水を引いてくることで、農薬や排水の混入しないキレイな水を確保している。

カワニナがいること
ゲンジボタルの幼虫がエサとするのがカワニナという巻き貝。カワニナもまたキレイな水がないと生息できない。

夜が暗いこと
ほたるが光を放つのは交尾の相手を探すための合図。特にメスは草むらで静かに光りながら、飛び回っているオスを待つので、その光を確認できるだけの暗さを確保することが重要になる。

住所：愛知県瀬戸市三沢町１-７０７　URL：http://park1.aeonnet.ne.jp/~hotaru

助成団体レポート②

日本トイレ協会

トイレから展開される環境・衛生教育

日本トイレ協会とは？

「日本トイレ協会」は、「公衆トイレをよくしたい」という有志によって設立された。その後、「トイレからの街づくり」をテーマに、環境・衛生、都市計画、防災、教育など、多岐にわたる領域に活動の幅を広げている。

また、同協会は、「適切なトイレを利用できない人を平成27年までに半減させる」という〈世界水フォーラム〉（平成15年）の国際合意の実現に向けた、トイレ環境改善の運動も行う。この活動の推進を図るための〈国際トイレワークショップ〉は、地球環境基金の助成によって、平成17年より開催されている。

途上国へのトイレ支援 トイレについて楽しく学ぶ授業

地球環境基金の助成による「日本トイレ協会」の活動のひとつが、ベトナムの農村地域（タインホア省）でのトイレ改善プログラムの実施だ。この活動は、タインホア省の3つ

（写真1）先生の腹部に隠された紐を引っぱると、なんと8mに！寄生虫の長さをイラストで示すだけでなく、その長さを長紐で実感してもらうことで、新鮮な驚きをもって子供たちは衛生管理の大切さを学ぶ。

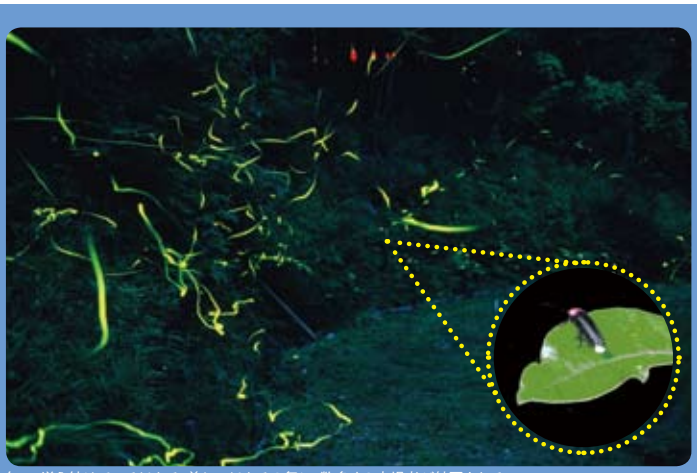
住所：東京都港区虎ノ門１-１-17　第２文成ビル 3F　URL：http://www.toilet.or.jp

ここでは、平成19年度の地球環境基金の助成事業のうち、助成3年目の2つの団体の活動と成果をご紹介します。平成20年度は、従来の「一般助成」に加えて、助成対象の裾野を広げる「発展助成」、洞爺湖サミットに関連する活動を対象とする「特別助成」の3種類の助成を行いました。平成20年度の助成事業の採択状況につきましては、別冊の「助成団体一覧」をご覧ください。

ほたるの鑑賞

ほたるのシーズンとなる6月中旬の約一週間、「ほたるの里」は無料で開放される。里全体の環境が改善されるにつれ、ほたるの数は増え続け、現在ではゲンジボタルのほか、自然繁殖したヘイケボタルやヒメボタルも加わり、数多くのほたるの飛翔を鑑賞できる。

そして、この期間に毎年5千人以上の人々が集まり、ほたるの美しい光の舞を楽しんでいる。「これだけ大勢の人たちが訪れて、喜んでいただけるということが、私たちの活動の成果であり喜びです」(加藤会長)。「里の会」の長年の努力が、ほたるのわずかなシーズンに凝縮されている。



年々、増え続けているほたる。美しいほたるの舞に、数多くの来場者が魅了される。

里山を体験する

「定光寺ほたるの里の会」が、地球環境基金の助成を機に始めた「里山体験教室」。ほたるの生息する環境づくりのための、田植えや稲刈り、カワニナの放流イベントなどを実施している。このような体験教室のなかでも、里山に自生するタケノコやキノコのような、季節のおみやげを持って帰れるイベントが人気だとか。

参加者は、市内だけでなく市外からもたくさん訪れる。「体験教室をやってよかったなと思うのは、町の中では見られない子供たちの目の輝きを見たときです」(桜井副会長)。恵み多き里山での思い出が、子供たちにとって何よりの収穫となるに違いない。

ゲンジボタルの幼虫のエサになるカワニナの放流。

(写真2)右のようなイラストから学んだことを実際にチャレンジ。手がキレイになるのがうれしい、手を洗うのが楽しい、そんな感覚を育むこともこのプログラムのねらいのひとつ。

の小学校で〈トイレについて楽しく学ぶ〉をテーマに授業を行うというもの。

授業では、現地の先生たちの意見を盛り込んだ紙芝居形式のイラストパネルを使い、長紐を寄生虫に見立てたり(写真1)、泡ぶくをたくさんつくって楽しみながら手を洗う(写真2)等の、体験型の学習が試みられた。

トイレの維持・管理に注目する理由

ベトナムのトイレ改善プログラムの目的は、学校を起点とした保健衛生と水質保全の向上である。というのも、タインホア省では素掘りのトイレが多く、雨が降るたびにその汚水が流れ出し、周囲への〈水質汚染〉を引き起こしているのだ。

他方、この地域のトイレ設備は少しずつ改善されつつあるが、使い慣れない真新しいトイレができても、住民たちは維持・管理ができず、結局、野外排泄や素掘りのトイレを使わざるをえなくなるという実情もある。

「途上国では、トイレを作ることに加え、トイレの必要性を理解し、正しく使うことのできる人を育てることも大切なんです」(加藤理事)。トイレの維持・管理というソフト面に注目する本協会の活動から、「環境」「衛生」「教育」といったキーワードがつなぎ合わさって見えてくる。